

■ PCN だより

PCN Volume 63, Number 4 の紹介 (その 1)

PCN は 2008 年から学会機関誌となり、学会ホームページの会員専用ページから学会員は PCN 誌を読むことができるようになった。オンライン投稿査読システムを取り入れたことにより、外国からの投稿数が格段に増加し、アジアにおける一般精神医学雑誌として重要な地位を占めるようになり、PCN の 2008 年度のインパクトファクターは 1,394 となった。2009 年度からは PCN Frontier Review として現時点での重要なテーマについての優れた総説を掲載している。このたび、アメリカ精神医学会との申し合わせにより、PCN の目次が American Journal of Psychiatry 紙上に掲載されることになった。

ここでは、PCN 最新号に掲載された海外からの論文を紹介する。PCN vol. 63, No. 4 に掲載された、海外からの Regular Article 14 本、Short Communication 2 本の和文抄録である。

Regular Article

1. Genetic association of BDNF val66met and GSK-3 β -50T/C polymorphisms with tardive dyskinesia

Sung Woo Park, Jung Goo Lee, Bo Geum Kong, Sun Jung Lee, Chan Hong Lee, Jeong Ik Kim, and Young Hoon Kim

Paik Institute for Clinical Research, Inje University, Korea

遅発性ジスキネジアと BDNF val 66 met 多型、GSK-3 β -50 T/C 多型との関連

【目的】遅発性ジスキネジアの発症には神経変性過程が関与していることが推察され、神経栄養

因子 BDNF の関与が考えられる。BDNF と glycogen synthase kinase (GSK)-3 β は神経細胞の生存に必要であり、遅発性ジスキネジアの発症に関与していることが考えられる。本研究では統合失調症患者で遅発性ジスキネジアを発症した群 (n=83)、統合失調症で遅発性ジスキネジアを発症していない群 (n=78)、健常対照群 (n=93) とについて BDNF val 66 met 多型と GSK-3 β プロモーター領域の -50 T/C 多型との関連を調べた。【方法】対象はすべて韓国人。BDNF と GSK-3 β 多型解析は PCR と RFLP 法により行った。【結果】三群間で BDNF と GSK-3 β の多型頻度に有意差は認められなかった。しかしながら、BDNF val 多型を有する者については、GSK-3 β の C/C 多型を有する者に遅発性ジスキネジア発症のリスクが有意に低いという結果を得た。【結論】GSK-3 β C/C 型と BDNF val 型とを有する統合失調症患者は遅発性ジスキネジアを発症しにくいという結果であり、両方の遺伝子の共同作用として遅発性ジスキネジアが発症していることを示唆する。

2. Pharmacokinetics and efficacy of a direct switch from conventional depot to risperidone long-acting injection in Chinese patients with schizophrenic and schizoaffective disorders

Ying-Ching Lai, Ming-Chyi Huang, Chun-Hsin Chen, Chang-Jer Tsai, Chun-Hung Pan, and Chih-Chiang Chiu, MD

Department of Psychiatry, Cathay General Hospital, Taiwan

統合失調症および統合失調感情障害の中国人患者に対する通常デポ剤からリスペリドン長時間作用注射剤への切り替え

【目的】統合失調症および統合失調感情障害患者に対して、通常デポ剤からリスペリドン長時間作用注射剤への切り替えを行い12週間にわたり有効性と薬物動態を調査した。【方法】8週間以上通常型デポ剤で治療されている統合失調症および統合失調感情障害患者に対して、長時間作用型リスペリドン注射剤へと切り替えた。初期用量は25 mg から始めて4週以降はその用量は2週間ごとに自由に変更できるものとして12週間観察した。【結果】25名の患者がエントリーされ、21名について解析した。変更12週間後の平均用量は31.25 mg であり、血清中のリスペリドンと9-ヒドロキシリスペリドンとを合わせた濃度は29.1 ng/mL であった。中国人における有効成分の血清中濃度はヨーロッパ人と比較して高い値であった。変更時から12週間後ではPANSS総得点は、67.5点から56.4点へ改善し、陰性症状も一般症状も改善を示していた。錐体外路症状得点は20.1点から5.5点へと改善を示した。また有意なコレステロール値とトリグリセライド値が認められ、空腹時血糖値、LDL値、体重には変化を認めなかった。【結論】長時間作用型リスペリドン注射剤への切り替えは症状の改善と副作用の低下に役立っていた。

3. Internet overuse and excessive daytime sleepiness in adolescents

Kwisook Choi, Hyunsook Son, Myunghee Park, Jinkyu Han, Kitai Kim, Byungkoo Lee, and Hyesun Gwak, PharmD,

Division of Life and Pharmaceutical Sciences, Ewha Womans University, Korea

若者に見られるインターネット乱用と日中の眠気について

【目的】インターネットの過剰使用と日中の眠気との関係について調査した。【方法】韓国の高

校生2,336名(男性57.5%,女性42.5%)に構造化された質問紙調査を行い、インターネット嗜癖はYoung's Internet addiction testを用いた。

【結果】男子生徒については、2.5%がインターネット嗜癖、53.7%がインターネット嗜癖の可能性と考えられた。女子生徒については、それぞれ1.9%と38.9%であった。日中の眠気は11.2%(男性11.2%,女性11.1%)に認められた。インターネット嗜癖は、男子生徒、アルコールを多く飲むもの、自分の健康について注意しないものに多かったが、タバコは無関係であった。日中の眠気は、インターネット嗜癖者の37.7%、インターネット嗜癖の可能性のある者の13.9%、対照者の7.4%に認められた。不眠、いびき、歯ぎしり、悪夢は、インターネット嗜癖者、嗜癖の可能性のある者、対照者の順に多かった。他の変数を調整した後でも、日中の眠気はインターネット嗜癖者では5.2倍、嗜癖の可能性のある者では1.9倍高かった。【結論】インターネット嗜癖は若者の日中の眠気と関係しているため、日中の眠気を診る臨床家はインターネット嗜癖について留意すべきである。

4. Randomized study of school-based intensive interpersonal psychotherapy for depressed adolescents with suicidal risk and parasuicide behaviors

Tze-Chun Tang, Shaw-Hwa Jou, Chih-Hung Ko, Shih-Yin Huang, and Cheng-Fang Yen

Department of Psychiatry, Kaohsiung Medical University Hospital, Kaohsiung Medical University, Taiwan

自殺関連行動と自殺リスクを有する抑うつ若者に対する学校における対人関係精神療法の効果について

【目的】自殺関連行動と自殺リスクを有する抑うつ若者に対する学校における対人関係精神療法(IPT-A-IN)の有効性を通常の対処法(TAU)と比較検討した。【方法】台湾南部の高校生の約

1/5 (347名) について Beck Depression Inventory-II, Beck Scale for Suicide Ideation, Beck Anxiety Inventory, Beck Hopelessness Scale を評価した。自殺のリスクのある抑うつ者 73 名について, IPT-A-IN 群あるいは TAU 群にランダム割り付けを行ない, それぞれの対処法の効果を比較検討した。【結果】 IPT-A-IN 群では, 抑うつの程度, 自殺念慮, 絶望において TAU 群と比較して有意差を認めた。【結論】 学校における対人関係精神療法は若者の抑うつ, 自殺念慮, 不安と絶望の軽減に有効である。

5. Psychiatric consultation for post-liver-transplantation patients

Nien-Mu Chiu, Chao-Long Chen, and Andrew T. A. Cheng

Departments of Psychiatry and General Surgery, Chang Gung Memorial Hospital Kaohsiung Medical Center, Chang Gung University College of Medicine, Taiwan

肝臓移植患者の精神科コンサルテーション

【目的】 肝臓移植を受けた入院患者の精神症状と外科医の精神科コンサルテーションへの考え方について調査した。【方法】 4 年間で 30 名の肝臓移植患者が Kaohsiung Chang Gung Memorial Hospital に入院した。これらの患者について臨床症状を後方視的に評価した。【結果】 患者のうち 70% (21 名) の診断は, せん妄 (8 名), 抑うつ (5 名), 不安・不眠 (8 名) であった。精神科の介入により, これらの症状は改善していたが, 抑うつ患者に対する抗うつ剤の使用については外科医と精神科医との間でよく一致しており, せん妄患者に対する抗精神病薬の使用についてはその一致が少なかった。移植後患者の多くには, 精神科コンサルテーション以前に抗不安薬が投与されていた。【結論】 肝臓移植患者の精神症状のマネジメントについて, 特に抑うつとせん妄を呈する患者では精神科コンサルテーションが有用であった。

6. Neurochemistry of the hippocampus in patients with obsessive-compulsive disorder

Murad Atmaca, Hanefi Yildirim, MD, Huseyin Ozdemir, Mustafa Koc, Sinan Ozler, and Ertan Tezcan

Department of Psychiatry, School of Medicine, Firat University, Elazig and Department of Psychiatry, School of Medicine, Maltepe University, Istanbul, Turkey

強迫性障害患者の海馬における神経化学的变化

【目的】 強迫性障害 (OCD) の海馬における神経化学的变化を MRS にて検討した。【方法】 強迫性障害 (18 名) と健常対照者 (18 名) についてプロトンマスマススペクトロスコピー (^1H -MRS) を施行して, 海馬における N-acetyl-l-aspartate (NAA), コリン (CHO), クレアチン (CRE) レベルを検討した。【結果】 OCD 患者の海馬における NAA/CRE 比と NAA/CHO 比は健常者と比較して有意に低下していた。【結論】 OCD における神経化学的变化が示唆されたが, 今後の数を増やした長期的な検討が必要である。

7. Estimation of premorbid general fluid intelligence using traditional Chinese reading performance in Taiwanese samples

Ying-Jen Chen, Meng-Yang Ho, Kwan-Ju Chen, Chia-Fen Hsu, and Shan-Jin Ryu

Graduate Institute of Clinical Behavioral Science, Chang Gung University and Chang Gung Memorial Hospital, Tao Yuan County, Taiwan

台湾人の漢字読み能力テストを用いた流動性知能の推定方法について

【目的】 伝統的な漢字読み能力が一般知能の指標となりうるかを調べることで, 年齢, 教育歴および Chinese Graded Word Reading Test (CGWRT) の成績から Raven's Standard Progressive Matrices (RSPM) の成績を予想する

ことができるかどうかを明らかにする。【方法】426名(男性201名,女性225名),16~93歳(平均 41.92 ± 18.19 歳)の健常者について漢字読み能力テスト(CGWRT)を施行してRSPM得点との相関を調べた。【結果】RSPM得点は,CGWRT得点,教育歴と相関しており,これらは年齢と逆相関を示し,RSPM得点の方がCGWRT得点よりも年齢による低下が大きかった。CGWRT得点と年齢と教育年数とからRSPM得点を算出する計算式が $0.71 \sim 0.80$ の間でパラメーターを変化させることにより成立していた。【結論】CGWRT得点からRSPM得点を予想することが可能である。

8. Body image and self-esteem in somatizing patients

Ozen O. Sertoz, Ozge Doganavsargil, and Hayriye Elbi

Department of Psychiatry, School of Medicine, Division of Consultation Liaison Psychiatry, Ege University, Izmir, Turkey

身体化障害患者におけるボディイメージとセルフエスティーム

【目的】身体化障害患者における身体的外観と身体機能への不満とセルフエスティームについて調べた。【方法】身体化障害(34名),乳房切断術を受けた乳がん患者(50名),健常者(44名)の女性についてボディイメージをBody Cathexis Scaleにより,セルフエスティームについてはRosenberg Self-Esteem Scaleを用いて調べた。【結果】身体化障害患者と乳房切除を受けた患者はともに健常対照者と比較して異なるボディイメージを有していた。両疾患とも,抑うつ症状で補正した後は,セルフエスティームについても同様であった。また,乳房切除を受けた患者と健常者との間にセルフエスティームの差異を認めなかった。身体化障害患者における低いセルフエスティームは抑うつ症状に起因していた。抑うつ症状のあるなしにかかわらず身体化障害患者は健常者と

は異なるボディイメージとセルフエスティームを示していた。【結論】身体機能と外観に不満足を示す身体化障害患者は低いセルフエスティームと抑うつとの合併を示していた。身体化障害患者への対応に当たっては,精神科合併症,セルフエスティーム,ボディイメージについて考慮することが重要である。

9. Smaller pituitary volume in adult patients with obsessive-compulsive disorder

Murad Atmaca, Hanefi Yildirim, Sinan Ozler, Mustafa Koc, Bilge Kara, and Semih Sec

Departments of Psychiatry and Radiology, Firat University School of Medicine, Elazig, Turkey

成人の強迫性障害患者における下垂体サイズの減少

【目的】強迫性障害においてはLHPA軸の異常を考えると下垂体が関与していることが推察される。これまでに子供のOCDにおける下垂体のサイズが検討されているが,成人についての検討はない。MRIにより成人OCD患者の下垂体サイズを検討した。【方法】1.7 TMRIによるT1強調冠状断により強迫性障害患者(23名)の下垂体サイズを健常者と比較検討した。【結果】強迫性障害患者では健常者と比較して有意に下垂体サイズが減少していた。下垂体サイズは性別でも有意差があり,強迫性障害患者についても下垂体サイズに性差があった。【結論】強迫性障害の児童においても同様の下垂体サイズの減少が示されており,経過観察とHPA軸の機能評価と合わせたMRI評価により今回の知見を確認する必要がある。

10. Dopamine receptor binding potential and occupancy in midbrain and temporal cortex by haloperidol, olanzapine and clozapine

Heli Tuppurainen, Jyrki T. Kuikka, Heimo Viinamaki, Minna Husso, and Jari Tiihonen

Department of Forensic Psychiatry, University of Kuopio, Kuopio, Finland

ハロペリドール, オランザピン, クロザピンによる中脳と側頭葉皮質におけるドパミン D 2/3 受容体結合定数と占拠率

【目的】統合失調症における線条体以外でのドパミン伝達の異常が言われており, 脳内各部位における第一世代抗精神病薬と第二世代抗精神病薬のドパミン D 2 受容体作用の差異が議論されている。ハロペリドール, オランザピン, クロザピンの中脳と側頭葉皮質におけるドパミン D 2/3 受容体結合定数 (BPapp) と占拠率について検討した。【方法】ハロペリドール投与中 (2 名), オランザピン投与中 (4 名), クロザピン投与中 (7 名) の統合失調症患者, 薬剤未投薬の患者 (6 名), 健常者 (7 名) について [¹²³I]epidepride をリガンドしてドパミン D 2/3 受容体への結合を評価した。【結果】クロザピン・オランザピン治療群とハロペリドール治療群との間には, 中脳におけるドパミン D 2/3 受容体結合能 BPapp と占拠率に有意差が認められた。最も低い占拠率はクロザピン治療群であり (5%), 次にオランザピン治療群であった (28%)。両薬剤の占拠率はハロペリドール群 (40%) と比較して有意に低値であった。これに対して側頭葉極においては占拠率に差異を認めなかった。占拠率は比較対象とする群により大きく異なり, 健常者群と基準とするといずれの薬剤も過大な占拠率を示していた。【結論】第一世代, 第二世代抗精神病薬は皮質のドパミン D 2/3 受容体を占拠することによりその治療効果を発揮するが, 中脳における第一世代と第二世代との間の D 2/3 占拠率の差異は急性期症状における黒質線条体系のドパミン神経伝達に影響を与えることによりその治療効果を説明できる。

11. Sleep paralysis in adolescents: The 'a dead body climbed on top of me' phenomenon in Mexico

Alejandro Jimenez-Genchi, Victor M. Avila-

Rodriguez, Frida Sanchez-Rojas, Blanca E. Vargas Terrez, and Alejandro Nenclares-Portocarrero

Clinical Services, National Institute of Psychiatry Ramon de la Fuente Muniz, Mexico DF, Mexico

思春期の睡眠麻痺——メキシコのいわゆる「死体に覆いかぶさられる」現象——

【目的】民間伝承の表現を用いて睡眠麻痺の特徴と有病率を明らかにすること。【方法】メキシコシティの高校生 322 名 (平均年齢 15.9±0.88 歳, 女性 66.8%) について質問紙と Epworth Sleepiness Scale とを用いて調査した。【結果】「死体に覆いかぶさられる」という表現を聞いたことがあるものは 92.5% であり, 実際に体験した者は 27.6% であった。睡眠麻痺の有病率は 25.5% であり, 入眠時幻覚の有病率は 22% であり, このうち 66% は 2 回以上の経験があった。発症の平均年齢は 12.5±3 歳であり, 日中の眠気スコアは睡眠麻痺の経験の有無により差異を認めなかった。72% は睡眠麻痺と入眠時幻覚を経験しており, 20.2% は睡眠麻痺のみ, 7.8% は入眠時幻覚のみを経験していた。1 回だけの体験者と複数回の体験者との間に差異を認めなかった。【結論】「死人に覆いかぶさられる」現象は, メキシコの若者についてはよく知られており, 睡眠麻痺とほぼ同等であった。若者にとって睡眠麻痺はしばしば入眠時幻覚とともに経験される。

12. The rapid-eye-movement sleep behavior disorder in Chinese-Taiwanese patients

Feng-Cheng Lin, Chiou-Lian Lai, Poyin Huang, Ching-Kuan Liu, and Chung-Yao Hsu
Department of Neurology, Kaohsiung Medical University Hospital and Department of Master's Program in Neurology, Faculty of Medicine, College of Medicine, Kaohsiung Medical University, Kaohsiung, Taiwan

台湾におけるREM睡眠異常行動 (RBD) について

【目的】欧米諸国においてのREM睡眠行動異常 (RBD) は多く報告されているが、台湾における実態について報告がないので調査した。【方法】2005年4月から2008年2月までKaohsiung Medical University Hospitalのカルテを後方視的に調査して70名のRBD患者について検討した。【結果】終夜PSG検査記録を後方視的に調査した。25名(35.7%)は女性、診断時の平均年齢は67歳、症状発現時の平均年齢は60歳であった。特発性RBDは28名が男性、18名が女性であった。夜間の寝室内の徘徊は11症例、寝室外の徘徊は7症例。19例がベッドからの転落を経験しており、27例は睡眠時の外傷を経験していた。【結論】台湾のRBDでは、欧米人と比較して、女性が多いこと、睡眠時外傷が少ないこと、睡眠時の徘徊が多いことが特徴であった。

13. Frontal and cingulate gray matter volume reduction in heroin dependence: Optimized voxel-based morphometry

Haihong Liu, Yihui Hao, MD, Yoshio Kaneko, Xuan Ouyang, Yan Zhang, Lin Xu, PhD, Zhimin Xue, and Zhening Liu

Mental Health Institute, Second Xiangya Hospital of Central South University, Changsha, Hunan, China

ヘロイン依存患者における前頭葉と帯状回における灰白質の減少

【目的】代表的なオピオイドであるヘロインの頻回使用により脳の各部位における神経解剖学的な変化が起こることが予想される。特に前頭葉と辺縁系皮質における灰白質の変化について検討した。【方法】MRIのoptimized voxel-based morphometryにより15名の中国人ヘロイン依存患者と15名の健常対照群とを比較した。【結果】ヘロイン依存患者群では、右前頭皮質、左補足運動野、両側帯状回で灰白質の減少が認められ

た。【結論】ヘロイン依存の病態には前頭葉皮質と帯状回が関与している。

14. Demographic and perinatal factors for behavioral problems among children aged 4-9 in Taiwan

Yen-Nan Chiu, Susan Shur-Fen Gau, Wen-Che Tsai, Wei-Tsuen Soong, and Chi-Yung Shang
Department of Psychiatry, National Taiwan University Hospital, Taipei

台湾における4~9歳児の問題行動の背景と周産期要因

【目的】児童の情緒と問題行動に対する年齢、性別、出生時要因、母親の心理的要因の影響について検討し、情緒・行動面での問題パターンと性別の関係を明らかにする。【方法】台北の4~9歳の児童1391名について調べた。母親により背景、出生前・出生時の要因、児童問題行動チェックリスト、中国版健康質問紙を記入してもらい、線型および非線型モデルにて解析した。【結果】男子は外的問題の得点が高く、女子は内的問題の得点が高かった。また、情緒と問題行動の合併には性差があった。年齢とともに攻撃性は減少し、注意と思考の問題は年齢とともに増加していた。母親の出生前・出生時のアルコールあるいはコーヒーの使用、性器出血、糖尿病や、子供の低体重、保育器の使用、さらに母親の心理的ストレスはいずれも児童の情緒・行動上の問題のリスクとなっていた。【結論】出生前および出生時要因、母親のケア、性別の評価が児童の情緒・行動上の問題への対処には重要である。

Short Communication

1. Prevalence and correlates of epileptic seizure in substance-abusing subjects

Surendra K. Mattoo, Shubh M. Singh, Rahul Bhardwaj, Suresh Kumar, Debasish Basu, and Parmanand Kulhara

Drug De-addiction and Treatment Center, De-

partment of Psychiatry, Postgraduate Institute of Medical Education and Research, Chandigarh, India

物質乱用者におけるてんかん性けいれんの有病率について

626名の物質乱用患者についててんかん性けいれんの有無を調査した。全患者の8.63%にけいれんが認められた(アルコール乱用者の9.2%, オピオイド乱用者の12.5%。けいれんの64.8%は物質乱用に関係しており, アルコール乱用者の離断時, dextropropoxypheneの乱用時, ヘロインやアヘンの中断時に多くみられた。アルコール乱用者については, 高齢者および依存期間の長い者に多く認められた。

2. Selected testosterone-related diseases in women who have given birth to a child with infantile autism

Svend Erik Mouridsen, Bente Rich, and Torben

Isager

Department of Child and Adolescent Psychiatry, Bispebjerg University Hospital, Canada

幼児自閉症児を出産した女性のテストステロン関連疾患について

【目的】幼児自閉症の母親(111名)と一般人口の母親(330名)とについて3つのテストステロン関連疾患の有病率を比較した。【方法】Danish National Hospital Registerにより母親の乳がん, 子宮がん, 卵巣がんの有病率を27年間にわたって調査した。【結果】3つのがん有病率について自閉症児の母親群(6.3%)と健常児の母親群(8.5%)との間に有意差を認めなかった。さらにいずれのがんについてもその有病率に有意差はなかった。【結論】幼児自閉症児の母親については, アンドロジェンによるがんの発生率の上昇を認めなかった。

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)